

九州における礫器の伝統と展開

清水 宗 昭

1. はじめに

旧石器時代及び縄文時代における礫器の研究については、賀川光夫博士の先駆的な研究がある。博士は、1987年に著わした「東アジアの前期旧石器文化」(賀川1987)の中で、中国での礫器の発達を主軸において、広く東アジアの礫器文化を考察した。その中で、とくに尖頭状礫器について、中国山西省西候度遺跡における下部洪積世の三稜大尖頭器主体の礫器文化を東アジアの基底文化と捉えており、その後中国では、藍田、三門峡、匭河等の文化期を経て、丁村遺跡の三稜大尖頭器(丁村尖頭器)に至る系譜を指摘している。さらにその文化は、東アジア全域に及び、その分枝として当然日本列島にも韓半島を経由し、到達したものとみている。その一つの証左として、大分県早水台遺跡出土の尖頭状礫器をあげている。

一方、賀川博士は、早水台遺跡の縄文時代早期押型文文化層に共伴する一連の礫器について明確な位置付けを行った。当初、この種の石器は、その石器として祖型的な形態から前期旧石器文化所産の混り込みであると指摘があったが(角田1962)、博士は、出土状況及び土器との共伴が明確なこと等によって、これらの礫器が縄文時代早期に特徴的な石器であることを実証した(賀川1969)。その後、大分県内を中心とする縄文早期の遺跡からこうした礫器が出土し、この文化期において主要な石器組成の要素であることが確実視されることになった(橘1970)。ともあれ、賀川博士は列島の縄文早期の礫器の源流がすでに列島の後期旧石器文化の中にあることを明確に示した(賀川1971)。博士の東アジアを視野に入れた、礫器の研究はその後の研究の大きな方向を示したことで高く評価されるものである。

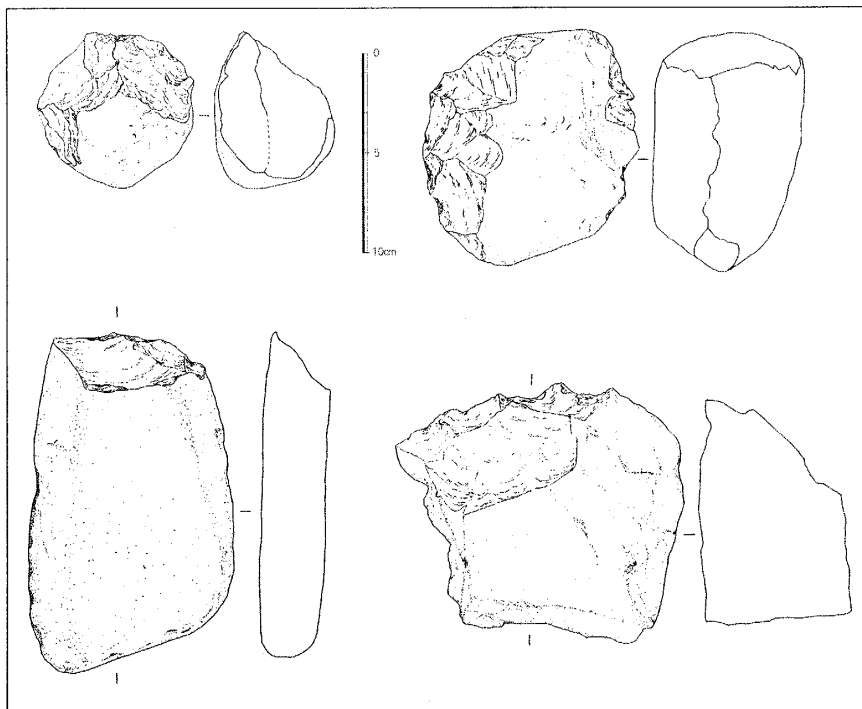
筆者は2004年7月、賀川博士のこうした一連の先駆的な業績をふまえ、近年実施された大分県内の遺跡出土の礫器の分析を試みた(清水2004)。その結果、東九州における縄文早期の礫器は、博士が早く考えを示されたように、その系譜を九州内の後期旧石器時代の石器群の構成要素である礫器に求めることができること、後期旧石器文化の礫器は、韓半島にそのルーツを辿ることができること、すなわち、縄文早期の礫器は、韓半島の新石器文化初頭の文化との直接的影響はみられないことを示した。以下、再度韓半島と九州の礫器について比較し、九州の礫器の特色について考えを明らかにしておきたい。

2. 韓半島の旧石器時代の礫器

(1) 中期旧石器文化の礫器

近年の韓国での旧石器時代の調査と研究は実に目覚ましいものがあり、今日、膨大な量の資料の蓄積がなされている。とくに、確実な中期旧石器時代の遺跡の調査が進展していることは注目される。その中で半島中部の全谷里遺跡では、アシューレアン型ハンドアックスの存在等中期旧石器の豊富

な石器文化が明らかにされてきている（小畑2001 a・b）。このほか、半島南部においても、公州石壯里（장용준 2003）、忠州鳴梧里、順天竹内里遺跡（이기길他 2000）等で、前・中期から後期旧石器文化への移行の様相が明確になってきている。近年、全羅南道で行われた、竹内里遺跡、道山遺跡（이기길他 2000）では豊富な礫器を主体とする石器群が確認されている。



第1図 全羅南道和順道山遺跡出土片刃礫器（이기길他 2000より）

その一つ道山遺跡では、4

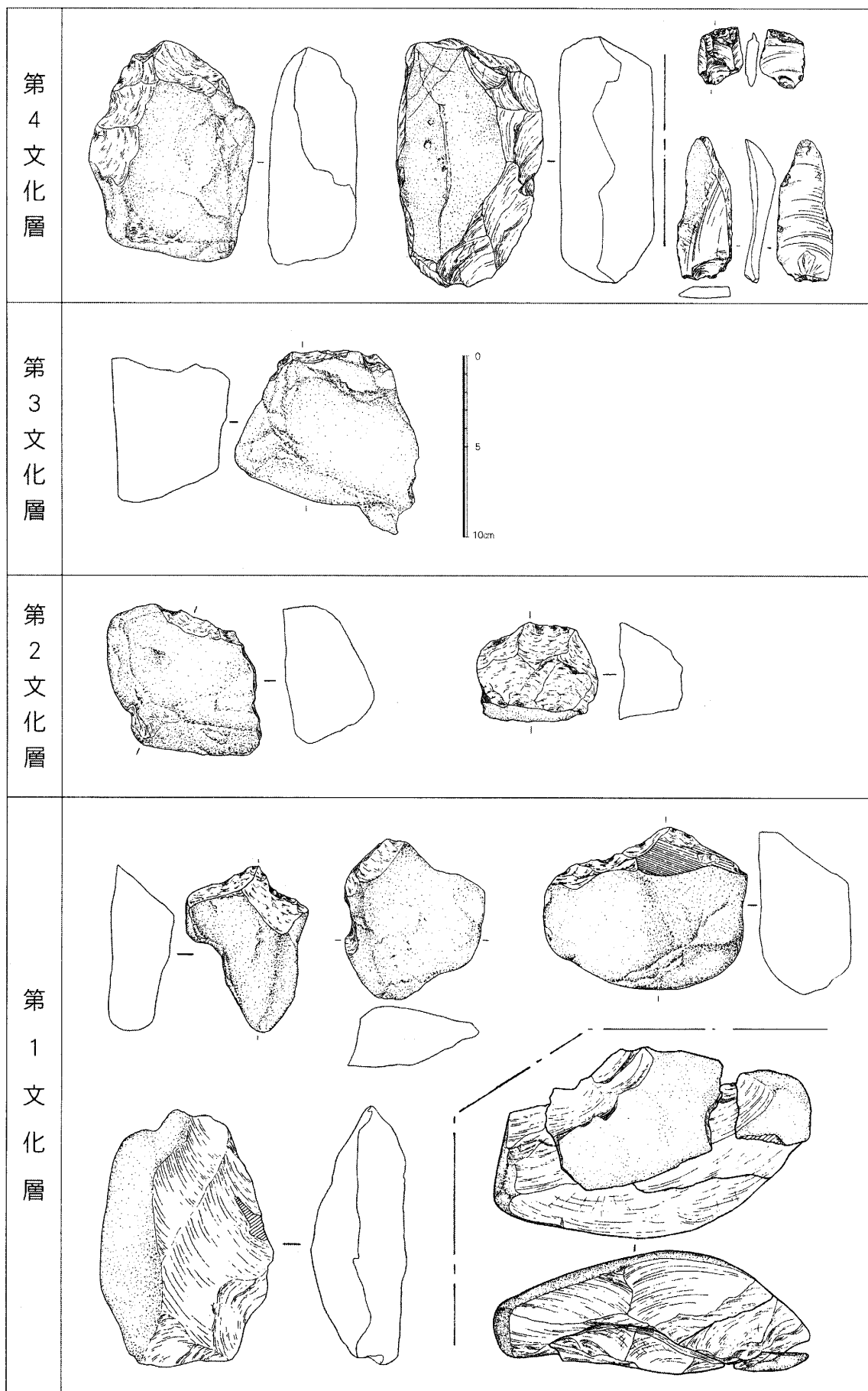
万5千前の層から変化に富む片刃礫器類が出土している。また、竹内里遺跡では、4つの旧石器文化層があり、いずれの層からも礫器類が出土している。最下層の第一文化層（54,720BP）からは、凝灰岩を主体とする片刃礫器、大型剥片石器、横長剥片石核等多様である。第2文化層（30,690OBP）第3文化層は出土石器は乏しいが、それでも礫核石器が中心となっている。

(2) 後期旧石器文化の礫器

韓国では同じく竹内里遺跡最上層の第4文化層はAT直後の文化層とみられ、2.4～2.5万年前の年代値が与えられている。ここでは、石英脈岩、凝灰岩を石材とする片刃礫器、両刃礫器が、流紋岩を素材とする縦長剥片石器類と共伴して出土している。この竹内里遺跡は、まさに中期旧石器文化から後期旧石器文化へかけての礫器の変遷を知ることができる稀少な遺跡である。

このほか、同じく半島南部の月坪遺跡は、後期旧石器後半（約2.5～2.4万年前）の文化の剥片尖頭器に伴って石英製のチョッパー（片刃礫器）、チョッピングツール（両刃礫器）が出土している。半島中部の忠清北道垂楊介（李・安蒜 2004）遺跡は月坪遺跡と同一文化期に属する豊富な石器群が知られている。ここでは、チョッパー、クリーバーと共に両面加工のハンドアックスさらに打製石斧、磨製石斧と一連の礫核石器組成の典型をみることができる。垂楊介遺跡の剥片石器類を含めた石器組成は、日本列島で展開する後期旧石器文化の石器群の要素をほとんど含んでいるものであり、その意味でも垂楊介遺跡の重要性はきわめて大きいといえる。

半島中部ではこのほか、後期後半の京畿道日山カワジ遺跡でチョッパー、ハンドアックス、忠清北道小魯里遺跡でチョッパー、忠清南道龍湖洞遺跡でチョッパー、江原道下花溪里遺跡でチョッパ



第2図 全羅南道竹内里遺跡出土石器編年 (이기길他 2000より作成)

一が出土しており、韓半島の全域にわたって礫器が石器組成の構成要素となっていることが知られる（小畑 2001b）。

3. 九州出土の旧石器時代の礫器

(1) 中期旧石器文化の礫器

九州における最古の礫器をもつ遺跡は、大分県早水台遺跡が確実にみられる。早水台下層の礫器については、芹沢長介氏の先駆的な調査・研究（芹沢 1965）があり、多数の礫核石器が報告されている。その中に1点、国東半島沖の姫島に産するガラス質安山岩の扁平礫を加工した小型のチョッピングツールが認められる。1点の出土であるが¹⁾、縄文時代に全く見られない形態、技法である。同質の石器の出土例が増えることが期待できる。他の石英脈岩石、石英粗面岩製では、とくに第6次の調査を行った柳田俊雄氏によってチョッパー、チョッピングツールが確認されている。（柳田 2004）これによると角礫もしくは亜角礫を素材としており、その関連は、韓半島南部の石英脈岩を素材とする中期の礫器群に求められるかもしれない。

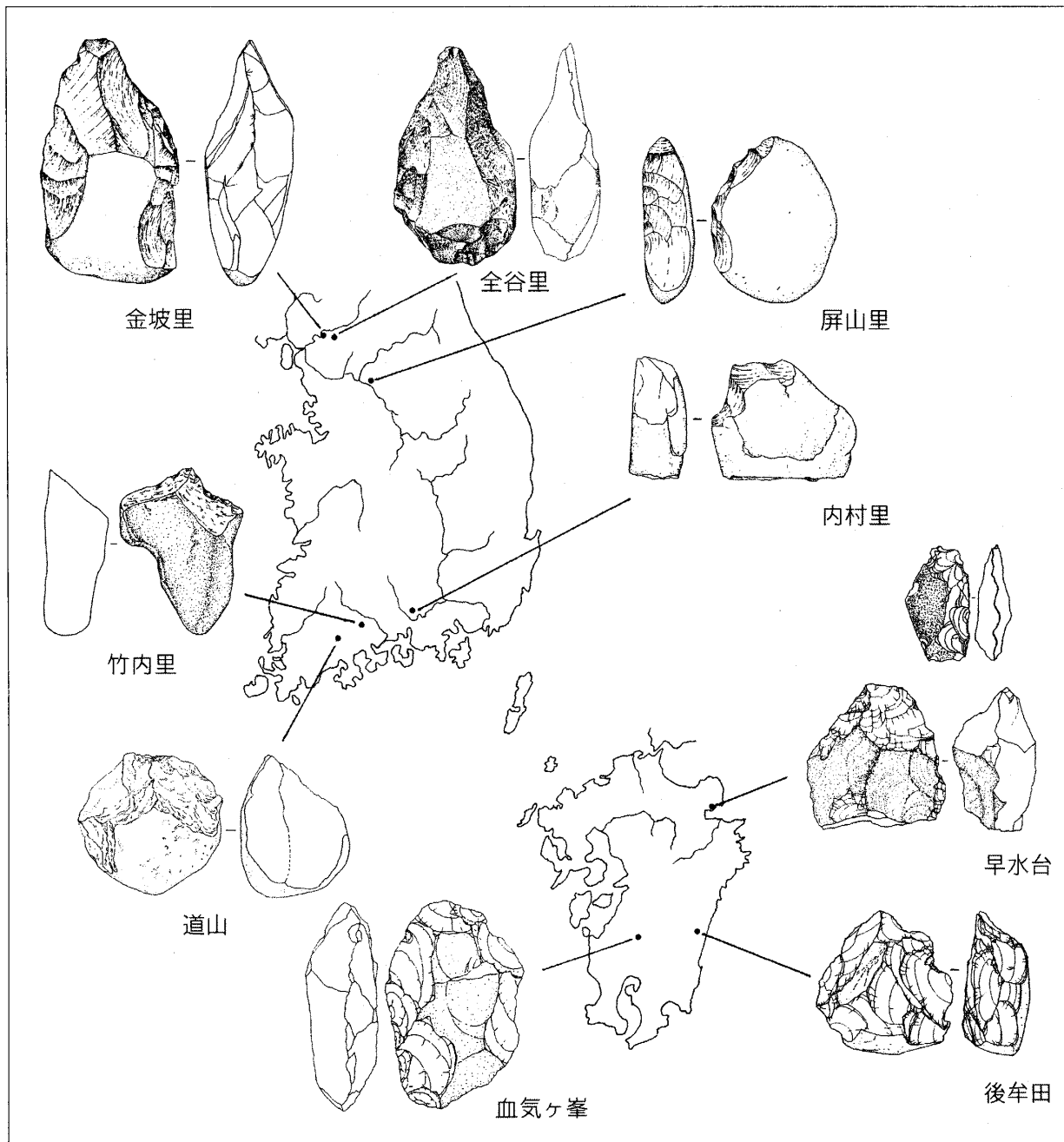
早水台遺跡の南西30kmにある上下田遺跡は、上層に細石核文化層があり、その直下の粘土層から礫器様の尖頭状石器が出土している（橘 1983）。橘昌信氏は、この石器を後期旧石器文化に先行するものとしているが層位的にその可能性は小さい²⁾。

(2) AT下位の礫器

早水台遺跡より新しいが、AT下位の後期旧石器文化初頭に位置づけられる宮崎県後牟田遺跡（橘他 2002）の石器群の中に両面加工の尖頭状礫器、斧状礫器が認められる。尖頭状礫器は、当初石核目的と思われる粗い加工であるが尖頭状の両面加工の礫器である。斧状礫器は、扁平礫を主に片面に集中して加工したものであり、九州における最古の斧状礫器とされるものである。大分県牟礼越遺跡も同時期に比較される（橘 1999）。このほか、前期旧石器論争の舞台となり、多数の斧状石器が出土した大分市丹生遺跡（鈴木 1992）については、鈴木忠司氏により、再評価と位置づけがなされ、この問題についての一つの決着がついている³⁾。

(3) AT上位の礫器

AT上位の石器群では、大分県大野郡岩戸第1文化層からやや小型であるが尖頭状両面加工の礫器が出土している（芹沢 1978）。分厚い円礫を素材としており、石核とするより礫器に分類されるものであろう。同じく大分市一方平I遺跡は大野川河岸段丘上の大規模な後期旧石器時代遺跡であり、AT上位の文化層から多量の石器群が出土している。その大半は石核との判別が困難なものが多く明確に礫器とされるものは少ない。その中で斜刃型の両刃礫器が出土している（綿貫 1999）。



第3図 韓半島と九州出土の礫器 (中期旧石器末～後期旧石器初)

(4) 細石刃文化に伴う礫器

九州における細石刃文化は、大きく土器を共伴しない前半期と土器を伴う後半期に分けられる。編年上、後半期は縄文草創期としている。この前半期では、宮崎県船野遺跡 (橘 1973)、大分県早水台遺跡、同上下田遺跡で礫器が出土している。船野遺跡では3点の片刃礫器が出土している。そのうち2点は、扁平な礫を素材として、ほぼ直線状の刃部をもつ。他の1点は分厚い円礫の一端を半円状の刃部としたものである。早水台遺跡では押型文文化層下部の細石核文化層から尖頭状礫器が出土している (賀川 1971)。それは、頁岩の円礫を節理面にそって半截したものを素材としている。上下田遺跡では、石核転用の両刃礫器が細石刃・核に共伴している (橘 1983)。

4. 縄文時代草創期の礫器

(1) 西北九州地方の礫器

九州では、韓半島に近い西北九州地方で縄文草創期の良好な包含層をもつ洞穴遺跡が知られている。長崎県福井洞穴遺跡と同泉福寺洞穴遺跡である。両者とも半島にルーツをもつとみられる隆帯文土器と細石刃の共伴する文化をもつ。前者では、その時期に伴う礫器は知られていないが、後者では、草創期の三文化層から少量であるが細石刃と共伴している（麻生 1985）。最下層の豆粒文土器層では分割した扁平礫を素材とした片刃礫と長円礫のほぼ片面に加工した斧状礫器が出土している。その上部の隆帯文土器文化層からも分厚い円礫の一端を加工した両刃礫器、分割礫と扁平垂角礫を素材とした斧状礫器が出土している。その上層の爪形文土器文化層では、両面加工の礫器状石器が出土しているが、この素材は大型の剥片の可能性がある。その上部の押圧文土器文化層と条痕文土器文化層（早期）からは礫器の共伴はなく、その上の押型文土器文化層に至って斧状礫器が出土している。

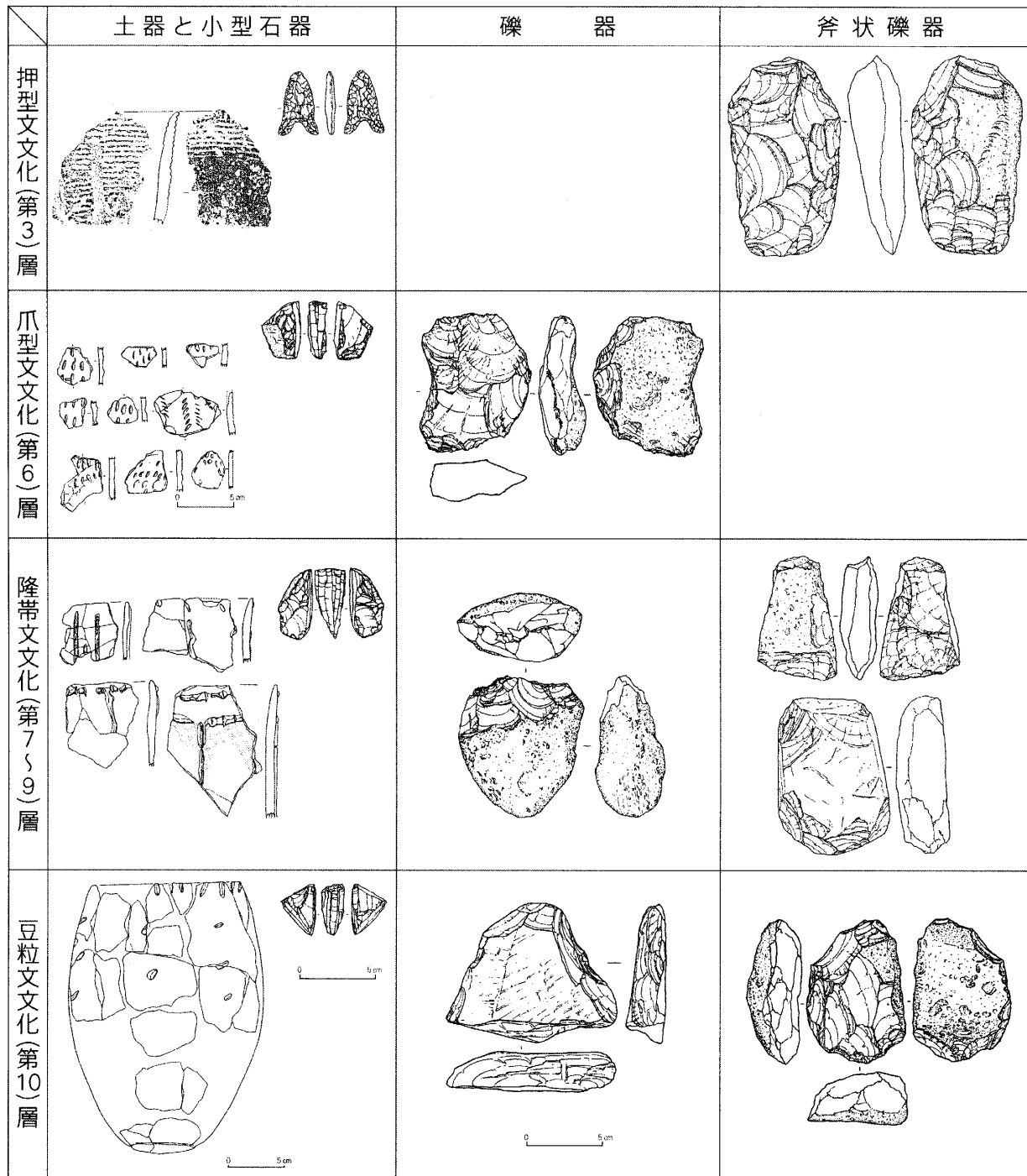
泉福寺洞穴では、最下部の二つの文化層に礫器類が顕著にみられた。とくに斧状礫器については、最下層の豆粒文文化層のものに比べてその直上の隆帯文文化のそれは、形態上いくらか発達しているよう感じがする。これらの礫器についてもはたして、こうした最古の土器、細石刃とともに半島よりもたらされた石器文化の要素なのか、これから彼地の資料との比較検討の必要があると思われる。

(2) 東九州地方の礫器

東九州地方では、層序的な草創期の遺物の出土例は少ないが、それでも散発的にみられる。一つは、大分川上流域の九重火山群山麓部にある前田遺跡第Ⅲ文化層である。ここからは、板状礫の一端を片面加工した片刃礫器と背面に自然面をのこす打製石斧（斧状礫器?）が出土している（高橋他 1989）。なお、片刃礫器も略長方形に近い形状から斧状礫器とみれなくもない。

他の一つは、最近調査がなされた大分県南部の番匠川流域の神ノ原下層の出土の礫器群である。調査報告書では、早期の範中に入れているが、下層の暗茶褐色土層は、条痕文土器と無文土器を主体とし、有舌尖頭器を伴う文化層である。上層の黒色土層は無文土器に加え、条痕文土器と押型文土器を若干伴う早期前葉の文化層である（吉田 2006）。石器としては細石鋸が見られる。このことから、神ノ原下層は二日市洞穴第9層（橘 1980）と同じ時期に比定できるもので、縄文時代草創期として問題ないものと考えられる。

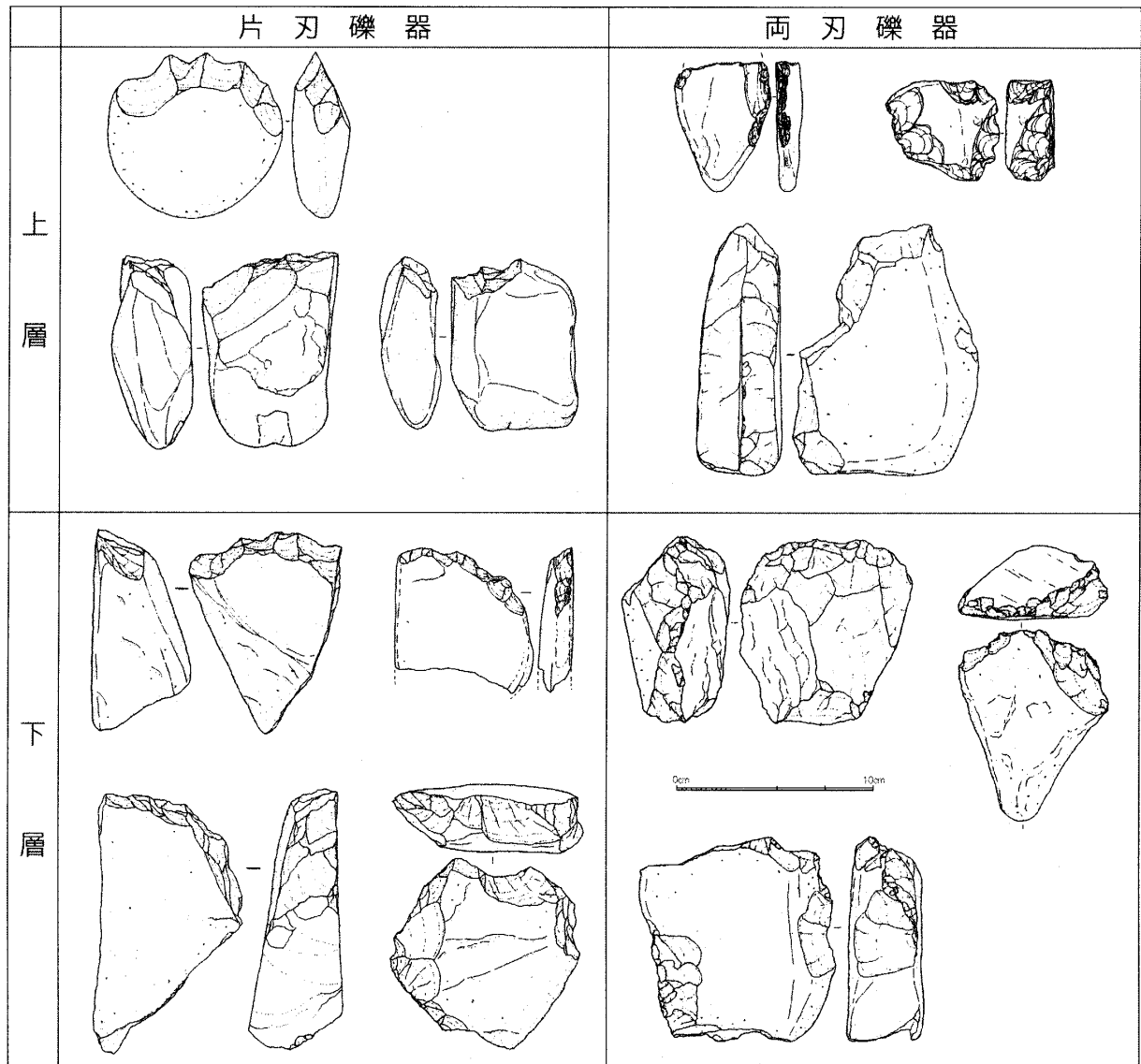
神ノ原遺跡下層の礫器は全て近くの河床で得られる硬砂岩を利用しており、(1)扁平な礫の一端に片刃加工したもの（Ⅰ-A型）、(2)分厚い板状礫を分割し、略三角形となった短辺に片刃加工したもの（Ⅰ-B型）、(3)扁平礫に山形、ノッチ等の加工を施し、複数の機能を持たした片刃礫器（Ⅰ-C型）、(4)扁平な垂角礫に錯交状に加工した両刃礫器（Ⅱ-B型）、(5)石核の残核の両刃礫器と多様である。なかでも(2)は神ノ原下層の礫器の中で比較的数が多く、目立つものである。



第4図 泉福寺洞穴出土礫器編年図 (麻生1985より作成)

(3) 神ノ原遺跡下層出土礫器の特徴

神ノ原下層の礫器は、石器組成の中でも大きな比重を占めるものであり、上層の礫器と比較してもその差位がみられる。そのもっとも特徴的なものは、片刃礫器の製作過程で分割による素材の調整という技法がみられたことである。それは、①できるだけ平坦面をもつ厚さが偏向する大きな扁平礫を2～3分割し、平面が略三角形の分割礫(素材)をつくる。②分割礫の短辺部(断面厚が薄い方)に平坦側から片面加工とし、刃部をつくる。③刃部以外の周縁の調整加工を行う。という順序である。この方法によれば、使用によって刃部が鈍くなった場合でも、再生加工が容易となる。



第5図 神ノ原遺跡出土の礫器（清水2006より作成）

なぜならば、平坦な片面からの加工によって、常に鋭い刃部保持されからである。要するにこのタイプの礫器は、常に消耗が激しい機能を有していたものと思われる。

なお、この横割り法ともいべき分割による片刃礫器製作の技法は、神ノ原遺跡上層の礫器の中には見られないが、同じ地域の早期の森の木遺跡において分割方による礫器素材の技法が確認されている（清水 2000）。

5. 縄文時代早期の礫器

西南日本の縄文時代早期の礫器として初めて報告され注目されたのは、和歌山県田辺市の高山寺遺跡の押型文土器に共伴するものである。ここでは片刃礫器・斧状礫器・尖頭状礫器・両刃礫器等が出土している（浦 1939）。

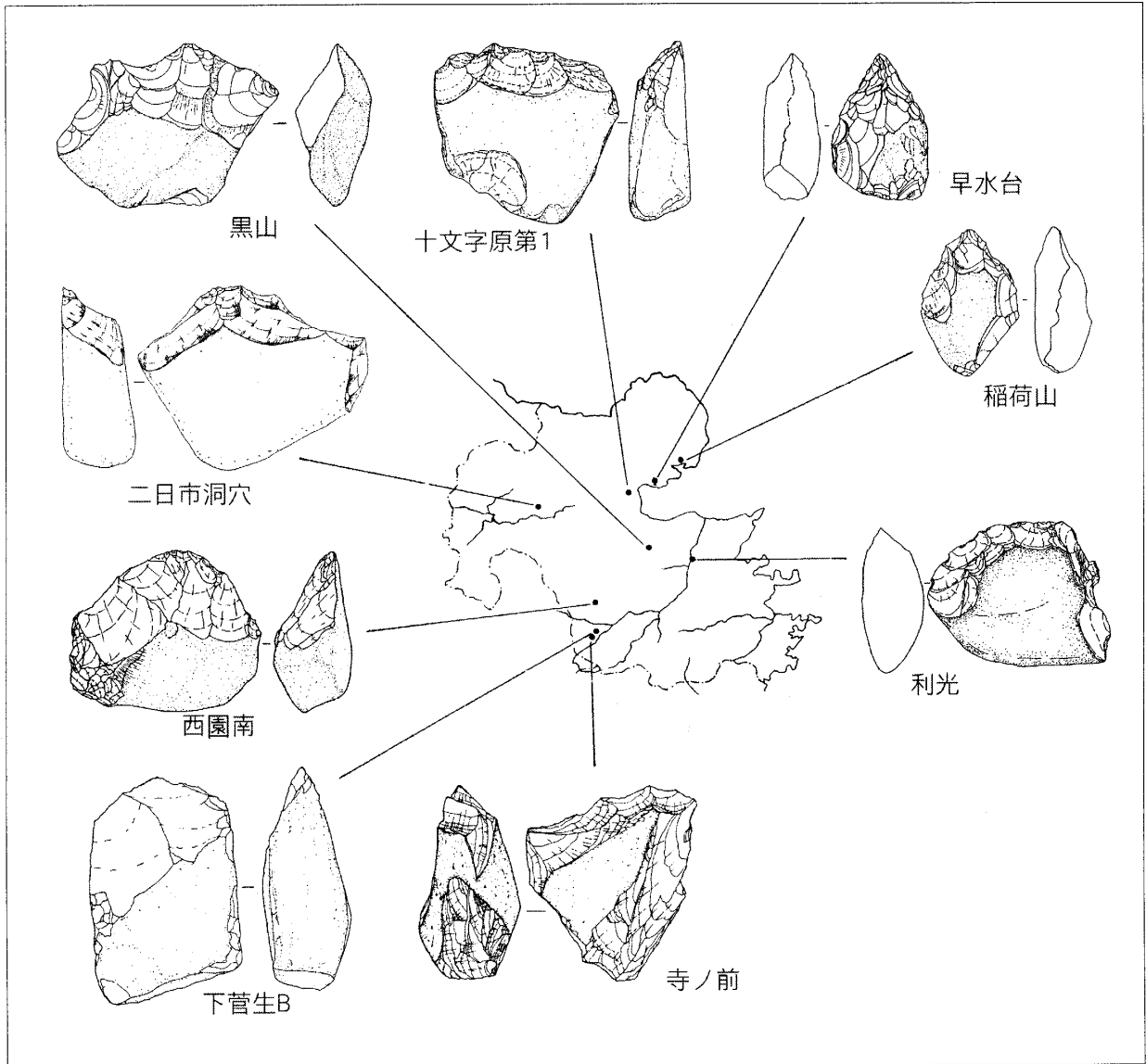
(1) 近年の縄文早期礫器の研究

九州地方では、前述したように、賀川博士によって縄文早期の礫器の研究の蓄積があり、近年類例資料の増加とあいまって、再び該期の礫器研究が行われるようになった。その中で荻幸二氏は、大分平野地域を中心とした早期出土の礫器について形態分類と機能の予察を行った(荻 2001・2002)。氏が対象とした遺跡は、主として、大野川下流域の洪積世台地、あるいは河岸段丘上の遺跡であり、他の石器や土器との共伴関係も把握されている。難を云えば、氏も指摘しているように早期を一括りにした時間幅の広さであり、分類があまりにも模式的過ぎることにある。石器の形態分類は少なくとも一つの遺跡の同一文化層の中でまず試みるのが肝要であろう。また、氏は草創期に礫器の欠落を指摘しているが、これは的を得ていない。九州においては、後期旧石器から縄文早期後葉に至るまで連綿と礫器の伝統は継続される。むしろその断絶は、磨製石斧が急速に増加する縄文時代前期に置かれるものと考えられる。

筆者は、近年行われた発掘調査の中で、県南番匠川流域の森の木遺跡から出土した早期中葉稲荷山式期に位置付けられる文化層の37点の礫器について分類を行った(清水 2000)。また、大分県内で礫器の出土が集中している別府湾沿岸域の早期礫器出土遺跡の類別についても試みた(清水 2004)。それは、礫器の出土量が多く、遺跡の存続期間も長い定着的居住地とみられる遺跡(A型)、礫器は比較的多いが土器が極端に少ない遺跡(B型)、土器を剥片石器類は多いがそれに比べ礫器の出土量が少ない遺跡(C型)、埋葬遺構の副葬品として出土する遺跡(D型)の4つに分類できるものとした。A型には、速見郡日出町エゴノクチ遺跡(高橋 1993)、旧南海部郡森の木遺跡、大分市黒岩遺跡、B型には大分市古城山遺跡(綿貫 1995)、同一方平Ⅲ遺跡(甲斐 1999)がある。C型は稲荷山遺跡(橋 1970)、早水台遺跡、利光遺跡(坂本 2002)、旧大分郡野津原町黒山遺跡(賀川他 1968)があり、このほか玖珠郡九重町二日市洞穴(橋 1980)、竹田市下菅生遺跡(後藤他 1981)、旧直入郡荻町寺ノ前遺跡(高橋 1988)がある。D型には、別府市十文字原第1遺跡(牧尾他 1983)にその典型例があり、そのほか大分市黒岩遺跡(清水他 2004)でも一部の配石遺構にその可能性がある。

(2) A型遺跡における礫器の組成

縄文早期の礫器44点と県下で最も多く出土したエゴノクチ遺跡は、別府湾から湯布院盆地へ抜ける鞍部にあたり、いわゆる十文字原高原の北端部標高400mの緩斜面に立地する。早期の時期は中葉から後半にかかるものとみられ、磨製石斧も2点出土している。礫器は、全て緻密な安山岩礫を利用している。器種は大きく片刃(I類)と両刃(II類)に大別できる。両者ともにさらに、その調整度によって3つに細別することができる。I-A・II-A類はともに扁平礫を用いる。いずれも刃部は一辺に集中している。I類の中には、刃部が鋸歯状となっているものもある。I-B・II-B類は、扁平礫を分割するかあるいは端部を欠き落とす方法で形を整え、他辺に加工を施したもの。I-C・II-C類は、さらにそれに調整打を加えたものである。分割あるいは欠き落としによって素

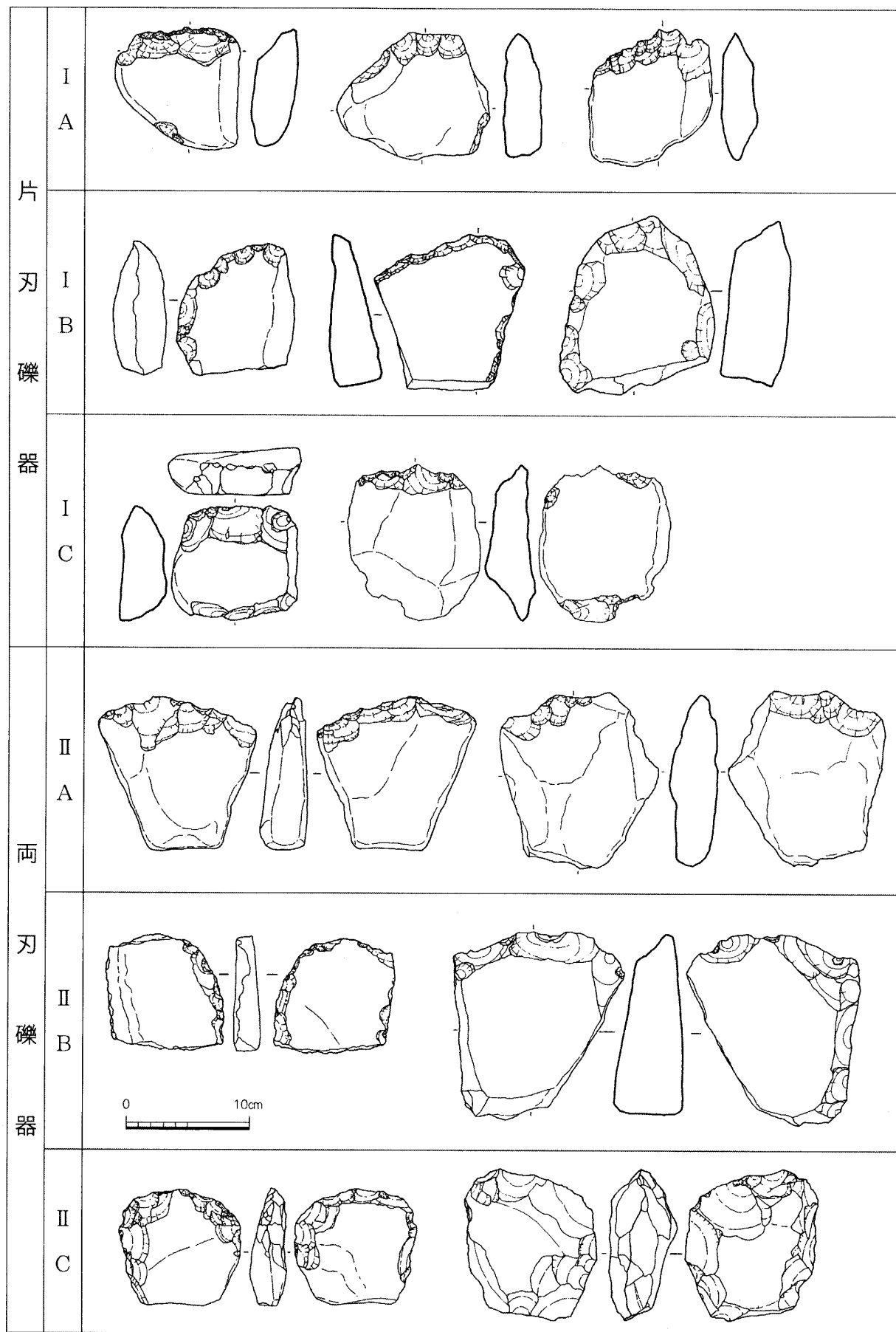


第6図 大分県内縄文時代早期C・D型遺跡出土礫器

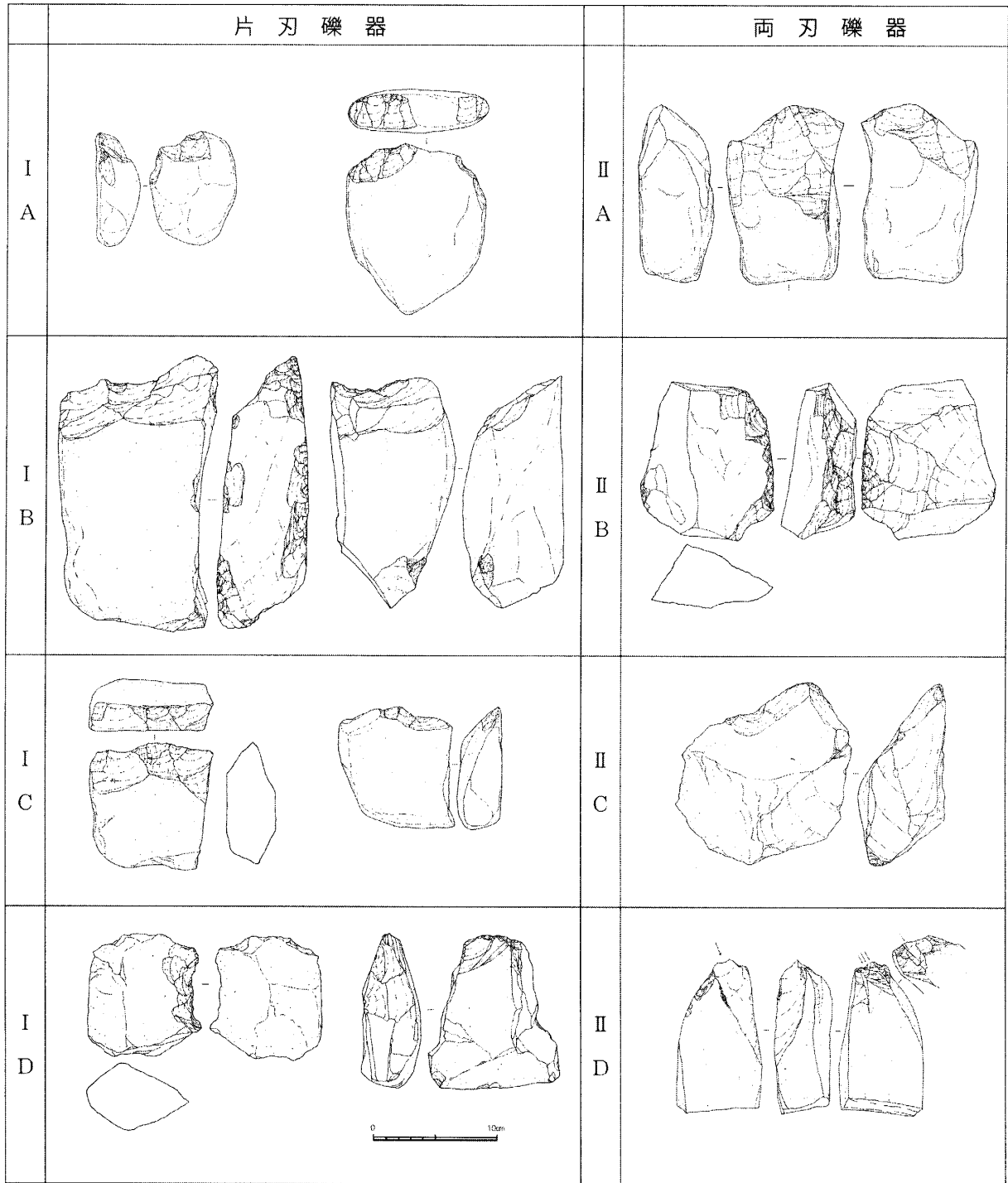
材礫の形と重量を調整する方法は、森の木遺跡で確認されている。また、この技法は、草創期の神ノ原下層において端的にみられるものである。なお、エゴノクチ遺跡では丘陵の頂部一帯に立石を伴う配石遺構が見つかっており、祭祀遺構とも推定される。早期押型文文化中葉（早水台式）の単純な埋葬遺跡である十文字原第1遺跡とも至近の距離にあり、その関係性が考えられる。

森の木遺跡は、土器の量はそれほど多く出土していないが立地からみて定着的な遺構とみられ、集石11基が層序関係にある。ここでは37点の礫器が出土している。片刃礫器23点、両刃礫器14点で、各々A～Dの4つに細別される。その分類については、エゴノクチ遺跡とほぼ共通しているが、森の木遺跡では、「森の木型」ともいうべき、大型の分割礫を素材とする片刃礫器と、同じく分割礫を素材とした特異な彫器状の礫器が存在する。これは、エゴノクチ遺跡と比較した場合、森の木遺跡が良好な礫器素材に恵まれていた条件に依るものと思われる。

黒岩遺跡は、大野川支流の奥まった狭な谷部の傾斜地にあり、閉塞的な立地である。ここでは、帯状施文押型文を主とする上下2層の文化層があり、各々多量の土器が出土しており、定着性のつ



第7図 エゴノクチ遺跡出土礫器の分類 (高橋1993より作成)



第8図 森の木遺跡出土礫器の分類 (清水2000を改変)

よい遺跡といえる。礫器は上層で12点、下層で17点と共に石器総数の2割に満たない。ここでは、礫器素材の確保に苦勞の跡が感じられる。遺跡は、良好な石材のある大野川本流より10km以上離れているためか、本流河床にみられるホルンフェルス、流紋岩、安山岩等の均質な石材はみられず、替りに近くの小河川の転礫を利用している。それは、基盤岩である礫岩から遊離した石材であり、石質は多様である。玢岩、片岩、礫岩、砂岩等がある。身辺に得られる礫素材という点では他の2遺跡とも共通しているといえる。また、ここでも分割礫が多様されている⁴⁾。要するに礫器に利用する石材は、その運搬にかかる重量に制約されることが大きいためか、より至近の場で得られる石材

を利用していることである。

(3) B型遺跡出土礫器の分類

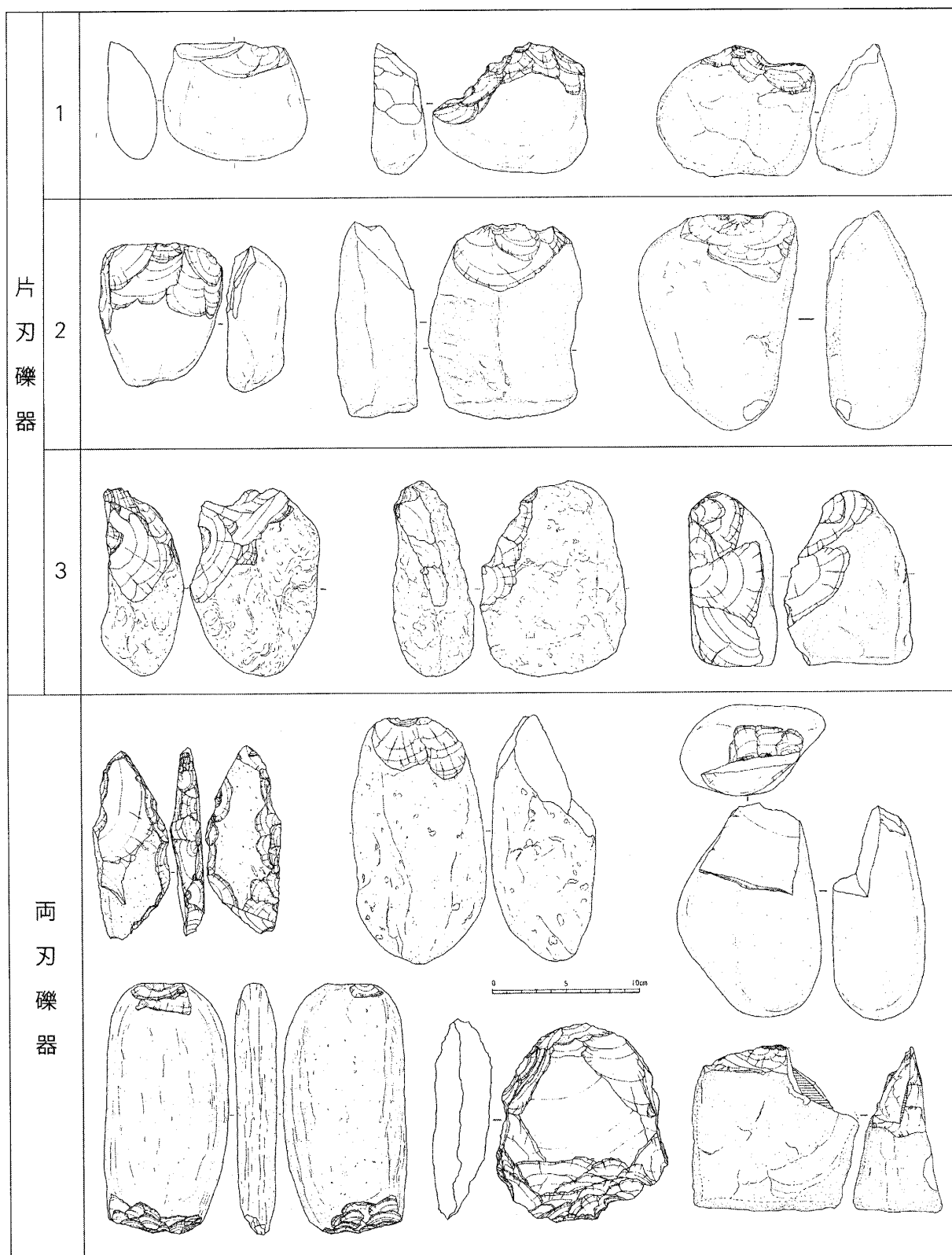
B型遺跡については大分市古城山遺跡・一方平Ⅲ遺跡がある。古城山遺跡は、押型文文化期の洪積世台地に刻まれた小谷の谷頭に立地する。土器の出土数が少なく、キャンプサイトの遺跡と考えられる。礫器類は27点と比較的多く出土している。若干の層序があるが、明確な分離は困難である。主体となる第2層は、押型文化層となっており、礫器の大半はこの文化の所産である。出土の礫器は片刃と両刃に大別できるが数量的には片刃礫器が多い。両刃礫器については明確な両刃というものは少ない。それは片面を大きな剥離で形成した後、加工が片面に集中するもの、片面の加工が一方に比べて小さいことである。この両者はいずれもほとんど片刃礫器と云ってもよいものである。

片刃礫器は3つに分類できる。1は分厚い楕円礫の一長辺側に刃部を付けるもので横刃型と云ってよいもの。2は楕円礫の短辺部の一端に刃部を付る縦刃型といえるもの。3は楕円礫の軸対し斜めに刃部を付ける斜刃型とされるものである。素材はいずれも分厚い楕円礫を使用している点で共通している。横刃型の1つは加工が入念に施されており、刃部も湾曲しているが、これは使用の頻度が高く、刃部の再生が進んだものと思われる。これは、石材の良質さと背面の礫面の平坦さによってなされたものと考えられる。

このほか、両刃礫器の中に2点の斧状石器がみられる。1つは結晶片岩の長円形の扁平礫の一端に刃部を付けたもの、他は分厚い大型剥片を両面加工としたもので、幅広い打製石斧状となっている。

一方平Ⅲ遺跡は、無文土器が少量出土しているに過ぎない。時期としては、早期の前半代になるものとみられる。礫器は総数30点程出土している。ここでは明確な両刃礫器は1点のみであり、他は片刃礫器である。片刃礫器の形態は多様である。大きくは、分厚い円礫を素材とするものと分割礫を素材とするものに大別できる。円礫素材のものは、刃部がやや尖頭状になるもの、三方に刃部をもつものがある。大型の略長方形の扁平礫を利用したものは、背面が平坦であり、斧状礫器としてよいものである。分割した礫は、素材として分厚さを保っており、中には節理面にそって割ったものがある。前述したように分割礫の利点は、分割面が平坦であるために、片刃の場合、刃部の再生が容易である点があげられよう。

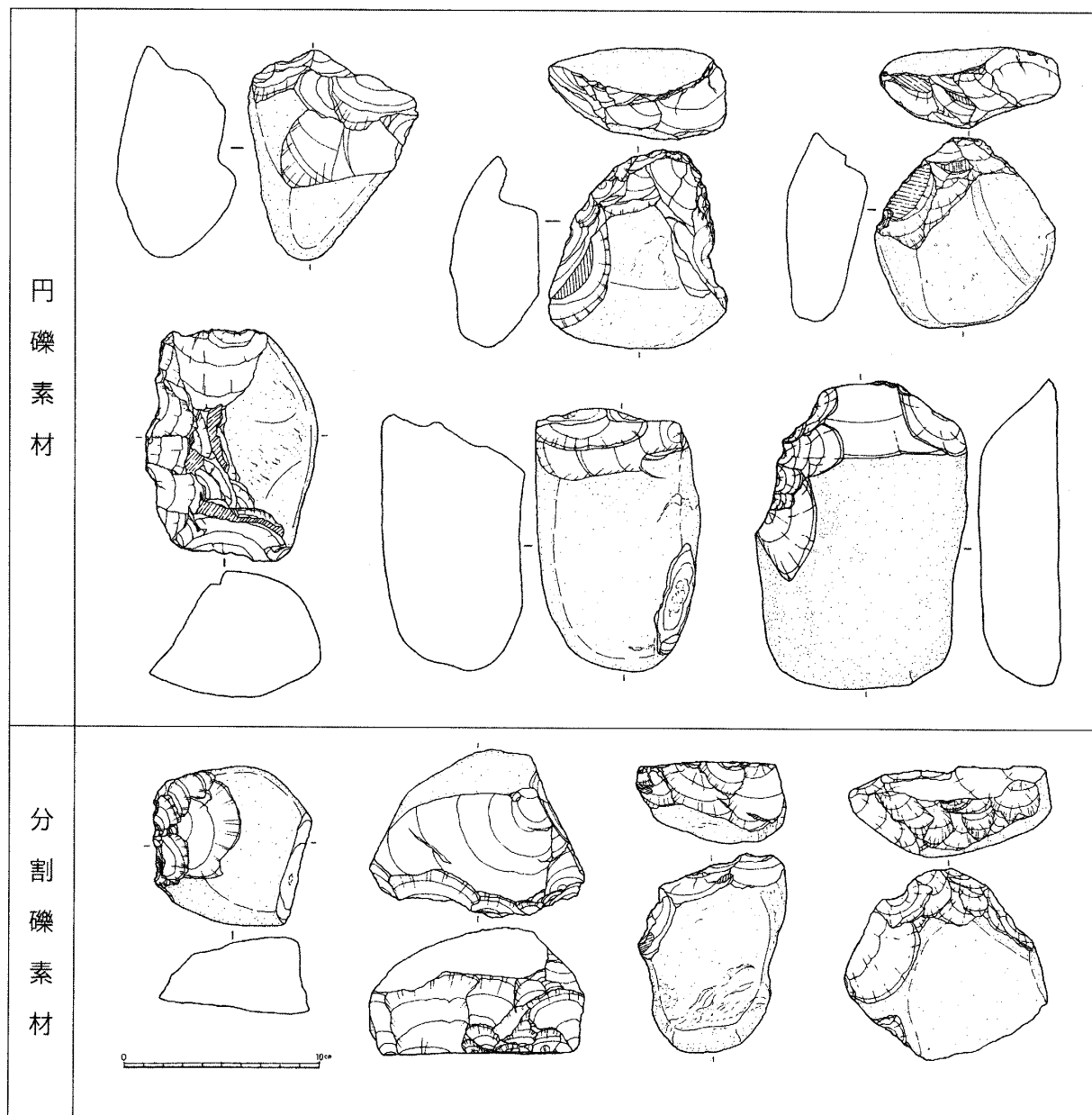
一方平Ⅰ遺跡は、大野川の河岸段丘上に立地する早期末葉の遺跡である。15点の礫器が出土しており、片刃・両刃はほぼ半数である。その素材はいずれも分厚い円礫を主体としており、そのほか垂角礫のもの2点、分割礫1点となっている。片刃礫器は刃部が山形をなすもの、尖頭状をなすものがある。両刃礫器は素材・刃部ともに多様である。斜めに刃部をもつものに錯交状の剥離をもつものがある。また分厚い剥片をさらに分割したものを素材とする入念な両面加工をしたものもみられる。片刃礫器に対して両刃礫器の比率が高いことがこの遺跡の特徴といえる。



第9図 古城山遺跡出土礫器の分類 (綿貫1995より作成)

(4) 縄文早期の礫器の特徴

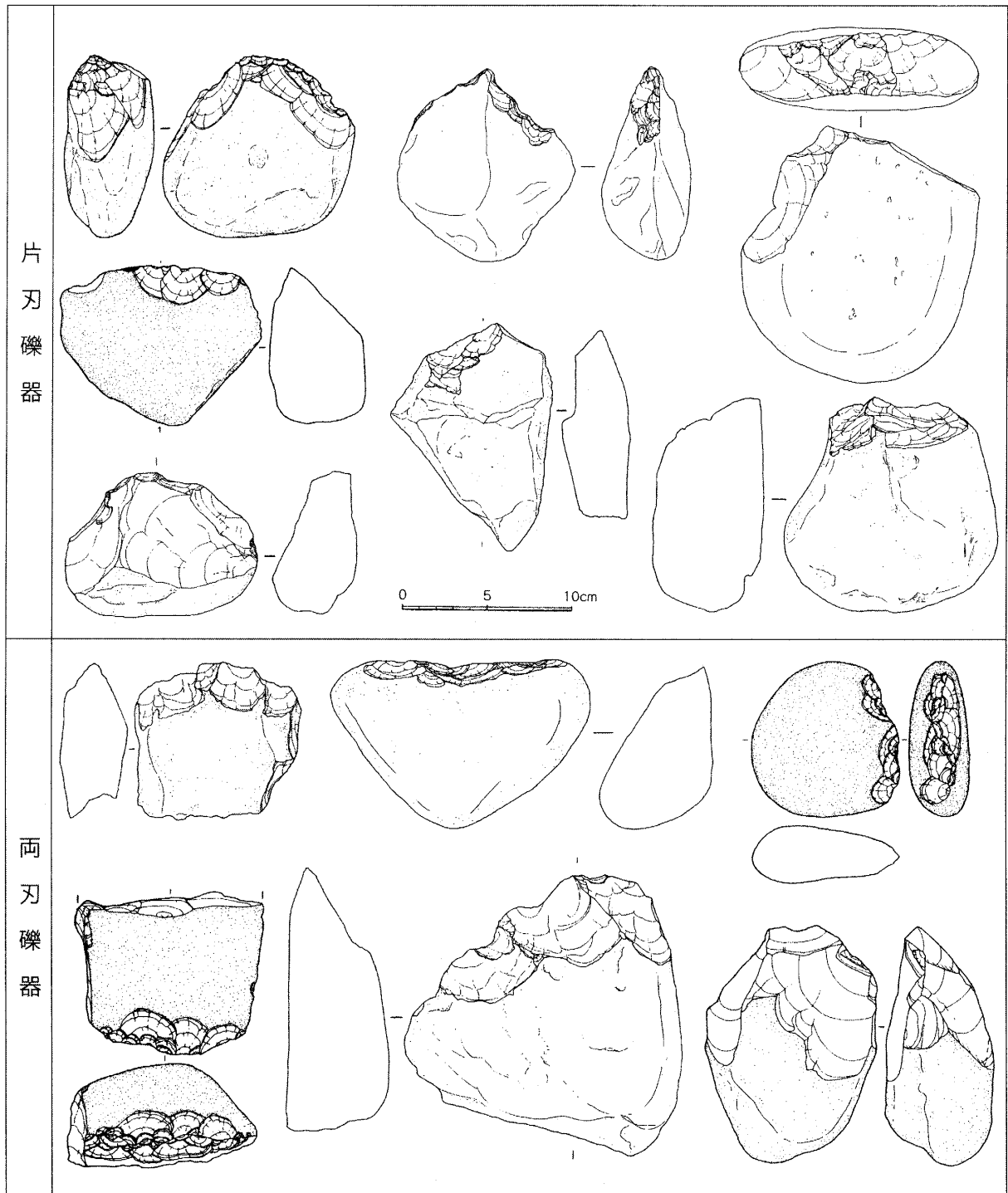
早期は草創期に比べ時間幅は広いとみられ、前・中・後の三時期に大別する。比較的多くの礫器を出土したA型・B型の早期遺跡の礫器について傾向性が見つかめるか試みたい。早期の前葉に属する遺跡は一方平Ⅲ遺跡 (B型)、中葉は森の木遺跡 (A型)、エゴノクチ遺跡 (A型)、後葉は古城山



第10図 一方平Ⅲ遺跡出土片刃礫器の分類 (甲斐他1999より作成)

遺跡 (B型)、一方平Ⅰ遺跡 (B型) である。

早期前葉の一方平Ⅲ遺跡では片刃礫器が優勢である。ここでは両刃礫器は1点しかない。前者についても両刃礫器の多くは、片刃礫器の刃部再生が補強によるものが多いとされてい。さらにこの時期においては、分割礫を素材とするものが多いことである。原礫を使うことと同じ程度に大型礫を分割して素材とすることである。これによって平坦な片面が確保され、刃部の再生が容易となり、鋭利性が保たれることになる。中葉については、森の木遺跡エゴノクチ遺跡の二遺跡についてであるが、これは、森の木遺跡の礫器分類による類型化が可能である。一方、両刃礫器が量的に増え加工もしっかりとしてくる。片刃、両刃ともに分割礫もしくは一部を欠き落とした礫を多く素材としており、また刃部以外に調整打をもつものもある。後葉については、古城山遺跡と一方平Ⅰ遺跡がある。この段階では、素材の調整にほとんど分割法は認められない。両遺跡に共通していえること



第11図 一方平 I 遺跡出土礫器の分類 (綿貫1999より作成)

はその素材の大半は分厚い円礫をそのまま加工している。いずれも原礫をそのまま生かす形で多様な刃部を形成している特徴をもつ。

以上のように、礫器を比較的多く出土する早期の遺跡については、定着的あるいはキャンプサイトの遺跡のいずれかであれ、遺跡毎の多少の個性差は見られるものの、前～後葉の時間の流れの中で、片刃主体→両刃併用、分割礫併用→原礫主体というような大まかな傾向性を把むことができる。片刃主体・分割礫併用については、その前段階の草創期においてその特色が指摘できるものであり、

早期前葉にその伝統が引きつがれていったものと推定できる。

6. 九州における礫器の伝統

(1) 旧石器時代の韓半島と九州の礫器

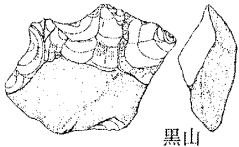

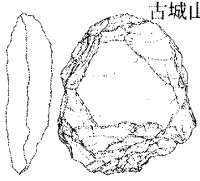
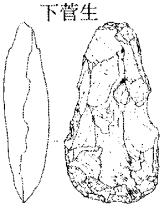
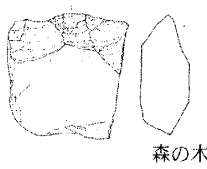
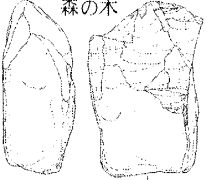
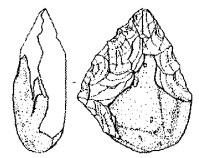
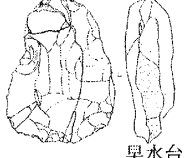

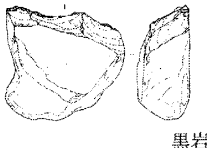
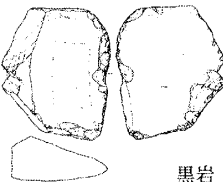

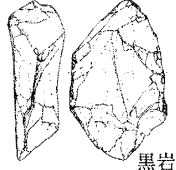


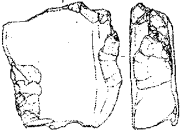
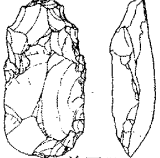
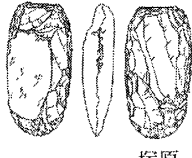
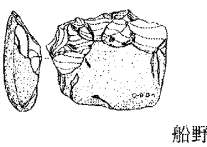

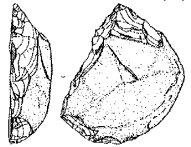




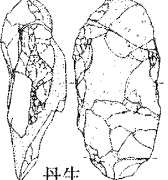
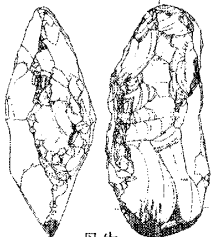
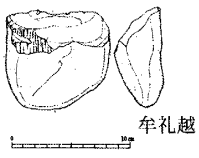

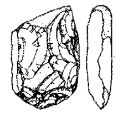
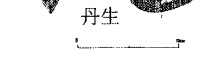
石器の中で人類が最初に作ったとされる礫器は、前期・中期旧石器の主要な道具であったが、東アジアでは、後期旧石器時代においても重要な石器組成の一つとして存続した。その伝統は日本列島の後期旧石器文化の中に見い出すことができる。列島の中期旧石器文化については、まだ論議の最中であり、その存在はまだ万人が認められるまでに至っていない。ただ、大分県早水台遺跡下層文化では、以前チョッピングツール（両刃礫器）が出土し、その後の調査によっても石英脈岩製のチョッパー、チョッピングツールが出土している（柳田 2003・2004）。韓半島でも近年の調査によって半島南部の中期旧石器時代遺跡から層序的に出土しており、その関係性は無視できないと思われる。半島と九州の氷期における地理的条件を考えてみた時、そこに大きな断絶があること自体が不自然なことである。降って遺跡、遺物が確実な九州の後期旧石器時代の初頭に位置するAT下位の石器群の中で礫器を明確に認めることができる。宮崎県後牟田遺跡における尖頭状礫器と斧状礫器の存在である。大分県牟礼越遺跡は後牟田遺跡より後出とみられるがAT下位の文化であり、片刃礫器を伴っている。

問題となるのは、大分市丹生遺跡出土の礫器群である。とくに大型の磨製石斧、斧状石器については、AT下位に位置付けられているが断定はできない。韓半島では、垂楊介遺跡において磨製石斧があり、これとの関係からAT降下以前に置くことには慎重さを要する。九州での磨製石斧の層位的出土例の増加を待ちたい。

AT上位についても礫器の出土例は少ない。東九州では、岩戸第I文化層で尖頭状礫器、一方平第I遺跡で両刃礫器が見られるに過ぎない。細石刃文化期では多少礫器数が増加する。船野遺跡の片刃礫器は扁平礫に横刃を付けるタイプであり、その入念な加工はその後縄文早期に多く見られる片刃礫器の祖型をなすものと云える。一方、早水台遺跡の細石刃文化に伴う尖頭状礫器は、AT下位の後牟田遺跡第II文化層、AT上位の岩戸遺跡第I文化層に系譜を求めることができるものであり、これはまた別府湾沿岸の早期の稲荷山遺跡、早水台遺跡の尖頭状礫器に連なる器種と考える。

(2) 縄文時代草創期、早期の礫器製作技法

礫器の素材はいうまでもなく原礫そのものであるが、縄文時代に入って、原礫を分割してその形状を調整して素材とする方法が特徴的に見られた。その最初の顕著な例が神ノ原遺跡である。それは、分厚い砂岩の板状礫を平面的に2～3分割する横割り法ともいべき素材調整法である。これは、平坦面をもつ礫素材を確保するために大型の板状礫を選択したもので、板状礫が得易い砂岩地帯ならでは技法とも云える。神ノ原遺跡下層の片刃礫器の製作に見られる特徴的な技法である。こうした板状あるいは扁平的を分割あるいは余分な部位を大胆に欠き落として礫器素材とする方法は、

	片刃礫器	両刃礫器	尖頭状礫器	斧状礫器・打製石斧	磨製石斧
縄文時代早期後葉	 黒山	 黒山		 古城山	 下菅生
縄文時代早期中葉	 森の木	 森の木	 早水台	 早水台	 森の木
縄文時代早期前葉	 黒岩	 黒岩	 稲荷山	 黒岩	 別府原
縄文時代草創期	 神ノ原	 神ノ原		 前田Ⅲ	 塚原
細石刃文化	 船野	 上下田	 早水台	 松山	 市ノ久保
後期旧石器文化(A,T)上位		 一方平Ⅰ	 岩戸	 丹生	 丹生
後期旧石器文化(A,T)下位	 牟礼越		 後牟田Ⅱ	 後牟田Ⅲ	 丹生

第12図 東九州地方の礫石器の変遷 (清水2004を改変)

同じ砂岩地帯の早期中葉の森の木遺跡においても引き継がれているようである。森の木遺跡では大型のもの (I-B)、小型のもの (I-C) に分けられるが、とくにI-Bタイプは大胆なカット技法によって素材を整えていることが明瞭である (清水 2000)。

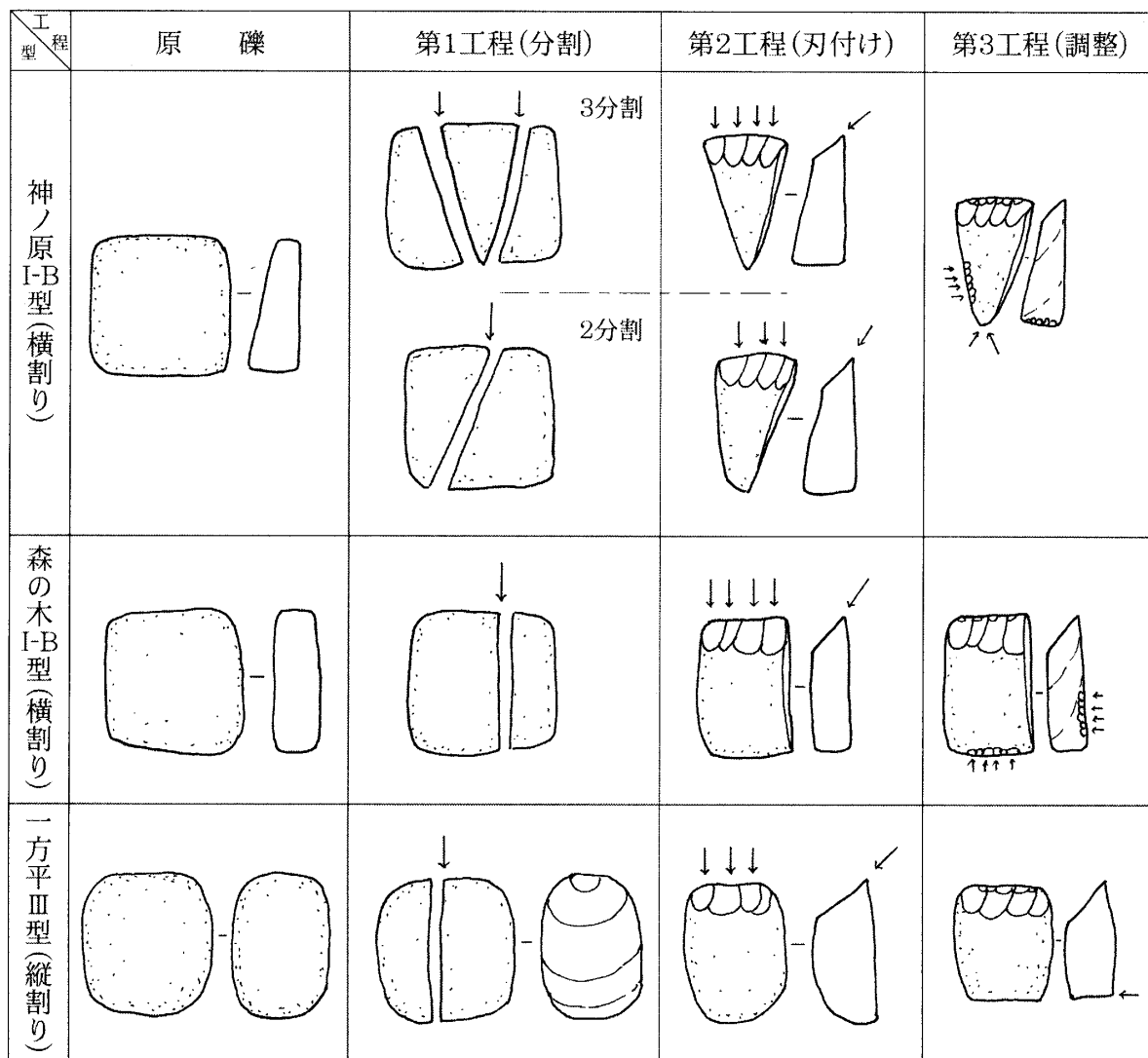
一方、石材がホルンフェルスあるいは無斑晶流紋岩等の扁平礫となりにくい円礫を主体とする大野川下流域の遺跡では様子が少し変わってくる。早期前葉の一方平Ⅲ遺跡はこうした円礫を縦割りによって2分割したものを素材としている片刃礫器が多く見られる。分割礫は、剥離の性格上、石核

側と剥片側に分かれるが剥片側も相当分厚い状態であり、いわゆる一般の剥片素材は異なるものと理解してよい。それゆえにこれらを素材とするものは、大型剥片石器とは区別してよいものと考えられる。その際、剥離が節理面にそって行われることがあり、これは完全な平坦面となる場合が多い。むしろ片面をより平坦面とするためこうした方法が意図されたことがうかがわれる。

7. まとめ

縄文時代早期の礫器は、後葉になると分割技法もなくなり、片刃礫器へのこだわりも消えたように見える。これが縄文時代前期になれば礫器そのものがほとんど姿を消していく。この現象は、前期段階に急速に増加してくる磨製石斧の役割と大きく関係しているものと考えられる。片刃礫器がとくに樹木の伐開等の粗い作業に使用された可能性が大きいことから、それに替る磨製石斧の定着と盛行は、必然的に機能が重複する礫器類の衰微につながっていったものと推定できる⁵⁾。

今回、対象とした資料は出土遺跡の制限があって東九州地方に偏ってしまった。それでも、前論で述べたとおり (清水 2004)、九州における礫器は、旧石器段階では、韓半島からの直接的な文化



第13図 分割法による片刃礫器の製作工程模式図

による所産といえるものであり、後氷期に入ってからはその影響は小さく、列島内での礫器の組成が細石刃文化→縄文草創期→縄文早期と引き継がれていくことに問題ないとする。ともすれば、旧石器時代、縄文時代を通じて剥片石器に比べ礫器は、その形状から前期旧石器の混入説あるいは石核との判別の困難さから等閑視されがちであった。しかし、それは紛れもなく主要な石器であり、縄文時代の早期段階までは重要な機能を果たしていたことは疑いない。それは、埋葬の副葬品としても供されるなど、個人の普段の生活にとっても不可欠の愛着ある道具でもあったのである。今後は、さらに東九州以外での各時期の資料の増加を待ちたい。ユーラシア、韓半島からの文化の圧力によって形成された我が国の正しい石器文化を理解するためにも、原初的な形態をもつ礫器の研究は重要と考える。

本稿を草するにあたっては、熊本大学文学部助教授小畑弘巳先生並びに韓国朝鮮大学校教授李起吉先生に韓国の旧石器関係の御高著を賜り恩恵を受けた。記して感謝申し上げたい。

註

- 1) この石器については、調査者の芹沢長介氏は角閃石玢岩としているが、この石材は大分県東国東郡姫島村産のガラス質安山岩である。この石材は、大分県北部では後期旧石器時代にも使用されるが、主に縄文早期前半期の剥片石器の素材となっていることから綿貫俊一氏はその時期に疑義を挟んでいる。しかし、早水台出土のチョッピングツールはその形態が縄文早期や後期旧石器に全く見られない形態であり、調査・報告者の見解どおり早水台下層の所産と考える。なお、この石材は黒曜石に近い石質であり、風化の進行が非常に遅いことも付け加えておく。
- 2) 橘昌信氏は、上下田遺跡下層出土の大型剥片素材の両面加工石器を尖頭状礫器としているが、これは明らかに剥片石器であり、剥片素材の大型スクレイパーもしくはハンドアックスとすべきと考える。
- 3) 旧石器文化期における礫器の総括的な研究論は鈴木忠司氏による丹生遺跡の研究報告（鈴木 1992）に集約されている。この中にはユーラシア各地域の礫器、日本列島の後期旧石器・縄文時代の片刃礫器、九州地方の大型石器等のテーマについて論述されており、礫器研究の画期をなしている。とくに織笠昭氏による片刃礫器の考察は、列島全般にわたる片刃礫器についての精微な研究であり、礫器研究の定点とも評価されるものである。
- 4) 黒岩遺跡では均質な原礫に恵まれないため、礫岩からの形状不定の遊離礫を利用して、適度の大きさに整える分割を行っている。これも平坦な片面を確保するという点で早期の前葉の特色を表わしているといつてよい。
- 5) 高橋信武氏は、縄文早期のエゴノクチ遺跡と静岡県富士宮市若宮遺跡と比較し、後者が礫器の出土がなく、磨製石斧が101点出土していることから、エゴノクチ遺跡の礫器は磨製石斧の肩代わりとの考えを示した（高橋 1993）。

参考文献

- 浦宏 1939「紀伊国高山寺貝塚発掘調査報告」『考古学』10-7
- 角田文衛 1962「日本文化の源流」『古代文化』9-3 古代学協会
- 賀川光夫編 1965『早水台』大分県文化財調査報告第12輯 大分県教育委員会
- 芹沢長介 1965「大分県早水台遺跡における前期旧石器の研究」『日本文化研究所報告』1 東北大学日本文化研究所
- 賀川光夫他編 1968『黒山遺跡緊急発掘調査』大分県文化財発掘調査報告第17輯 大分県教育委員会
- 賀川光夫 1969「縄文早期の礫器」『古代文化』21-12
- 賀川光夫 1970「縄文文化の起源と押型文土器の発達」『史学論叢』5
- 橋昌信編 1970『稻荷山遺跡調査報告』大分県文化財調査報告第18集 大分県教育委員会
- 橋昌信 1970「押型文文化の礫器」『古代文化』22-11
- 賀川光夫 1971「西日本における礫器の問題」『第四紀研究』10-4
- 橋昌信 1973「宮崎県船野遺跡における細石器文化」『考古学論叢』第3集 別府大学考古学研究室
- 芹沢長介編 1978『岩戸』東北大学文学部考古学研究室-考古資料集-第2冊
- 橋昌信 1980『大分県二日市洞穴』別府大学附属博物館
- 後藤一重他編 1981『菅生台地の遺跡』IV 竹田市教育委員会
- 八幡一郎 1982「捺型文系文化と磨製石斧」『賀川光夫先生還暦記念論集』賀川光夫先生還暦記念会
- 橋昌信 1983『大分県上下田遺跡』第2次発掘調査報告書 別府大学附属博物館
- 牧尾義則・江田豊編 1983『十文字原遺跡群-九州横断自動車道建設に伴う発掘調査概報-』大分県教育委員会
- 高橋徹編 1983『荻台地の遺跡-寺ノ前遺跡・中山遺跡・蜘蛛手遺跡-』荻町教育委員会
- 麻生優 1985『泉福寺洞穴の発掘記録』築地書館
- 賀川光夫 1987「東アジアの前期旧石器文化-賈蘭波教授の三稜大尖状器(尖頭状礫器)の展開-」『東アジアの考古と歴史』日本・考古美術編(岡崎敬先生退官記念論集)
- 高橋信武・綿貫俊一編 1989『横枕B遺跡・前田遺跡』直入町教育委員会
- 橋昌信 1990『松山遺跡』別府大学附属博物館
- 鈴木忠司編 1992『大分県丹生遺跡群の研究』古代学協会
- ・佐川正敏「中国旧石器時代の礫器」
 - ・鈴木忠司「朝鮮半島の旧石器文化と丹生石器群」
 - ・橋昌信「九州における旧石器時代・縄文時代早期の礫器と斧状石器」
 - ・織笠昭「日本列島における片刃礫器と丹生I-B地点北区第2群石器の位置付け」
- 高橋信武編 1993『宇佐別府道路・日出ジャンクション関係埋蔵文化財調査報告書』大分県教育委員会

- 綿貫俊一編 1995『古城山ー大分南バイパス予定地内遺跡ー』大分県教育委員会
- 八幡一郎・賀川光夫 1996『早水台』大分県文化財調査報告書第3輯ー早水台遺跡特別報告ー大分県教育委員会
- 清水宗昭 1996「文献解題 旧石器時代の調査と研究」『九州の黎明と東アジア』(賀川光夫古希記念著作集)
- 綿貫俊一編 1999『スポーツ公園内遺跡群発掘調査報告書ー一方平遺跡Ⅰー』大分県教育委員会
- 甲斐寿義他編 1999『一方平遺跡Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ』大分県教育委員会
- 橋昌信編 1999『牟礼越遺跡』三重町教育委員会
- 高橋信武・清水宗昭編 2000『森の木遺跡』大分県文化財調査報告第109輯 大分県教育委員会・清水宗昭「礫器について」
- 이기길・최이노・김은정 2000『順天竹内里遺跡』朝鮮大学校博物館
- 村田好史 2001「人吉市・球磨地方のAT火山灰下位の石器群についてー人吉市鬼木町血気ヶ峯遺跡の石器文化を中心としてー」『ひとよし歴史研究』4号 人吉市教育委員会
- 荻幸二 2001『猪野新土井遺跡発掘調査報告書』大分市教育委員会
- 荻幸二 2001「縄文時代早期の大分平野出土の礫器に関するー考察」『FRONTIER』No.3 海部考古学研究会
- 龍田考古会編 2001『シンポジウム 海峡を越えてー原の辻以前の先史時代の人と交流ー』龍田考古会
- ・小畑弘巳 2001a「韓日旧石器時代の交流」『海峡を越えてー原の辻以前の先史時代の人と交流ー』龍田考古学会
 - ・小畑弘巳 2001b「朝鮮半島旧石器時代遺跡地名表」同上
 - ・富永明子編 2001「朝鮮半島新石器時代遺跡地名表」同上
- 이기길・黃昭姬訳 2001「韓国順天竹内里遺跡の旧石器文化」『旧石器考古学』62 旧石器文化談話会
- 橋昌信・佐藤宏之・山田哲編 2002『後牟田遺跡』後牟田遺跡調査団・川南町教育委員会
- 塔鼻光司・荻幸二編 2002「丹生遺跡群長迫地点」『大分市・市内遺跡確認調査概報・2001年度』大分市教育委員会
- 이기길・김은정・윤정국 2002『順天月坪遺跡』朝鮮大学校博物館
- 이기길・김은정・윤정국・김수아 2002『和順道山遺跡』朝鮮大学校博物館
- 日高広人編 2002『別府原遺跡・西ヶ迫遺跡・別府原第2遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第61集
- 坂本嘉弘他編 2002『利光遺跡』大分県文化財調査報告書第132輯 大分県教育委員会
- 荻幸二 2003「縄文時代早期大分平野出土の礫器に関するー考察(2)」『利根川』24・25 利根川同人

- 李東注 2003 「櫛目文土器段階 (中期) 의石器組成과特徴」『韓日新石器時代の石器』九州縄文研究会
- 小畑弘巳 2003 「朝鮮半島における後期旧石器時代初頭の文化」『後期旧石器時代のはじまりを探るー日本旧石器学会第1回シンポジウム予稿集ー』日本考古学協会
- 柳田俊雄・須藤隆 2003 「特集 前期旧石器40年ー大分県日出町早水台遺跡第6・7次発掘調査ー」『月刊 考古学ジャーナル6』No.503
- 장용준 2003 「석장리유적의재검토ー중 후지문화층을 중심으로ー」國立公州博物館紀要第3集 明治大学博物館・国立忠北大学校博物館編 2004 『韓国スヤング遺跡と日本の旧石器時代遺跡』明治大学博物館事務室
- 李隆助・安蒜政雄編 2004 『수양개와 그 이웃들』(第9回国際學術會議・資料集) 明治大学博物館事務室
- 柳田俊雄 2004 「早水台遺跡の第6・7次発掘調査の概要」『九州旧石器』第8号 九州旧石器文化研究会
- 清水宗昭 2004 「東九州における縄文時代早期の礫器について」『日・韓交流の考古学』九州考古学会・嶺南考古学会
- 清水宗昭・西哲弘・高橋信武編 2004 『黒岩遺跡』大分県文化財調査報告書第165輯
・清水宗昭「別府湾沿岸域における縄文時代早期の礫器について」
- 綿貫俊一 2004 「大分県の旧石器時代研究の歩み」『九州旧石器』第8号 九州旧石器文化研究会
- 藤木聡 2005 「宮崎県における縄文時代の石斧製作と石材」『Stone Sources』No5 石器原産地研究会
- 清水宗昭 2006 「縄文時代の石器」『神ノ原遺跡発掘調査報告書』佐伯市教育委員会